

北欧について III

—世界盲人福祉協議会実行委員会
(1981年5月4-8日 於ゲンツバーグ) —

社会福祉法人 日本ライトハウス
理事長 岩橋英行

目 次

序 文
はじめ
I. ゲンツバーグ会議におもう
1. 役員会(5月4日)
2. アジア委員会(5月4日)
3. 実行委員会(5月5日)
4. 世盲連／世盲協 合同実行委員会(5月8日)
II. 会議場にひろう
1. ホテルラマダの火事
2. 過ぎたるは及ばざるがごとし
3. 世盲協ともお別れしたい
4. スウェーデンの国籍を持つ日本人
5. バスの中にて
6. レセプションのひとこま
III. 施設訪問
1. 障害者専用病院を訪ねて
2. 障害者の憩いの家を訪ねて
IV. 英国ブライトンのジョン・ウィルソン卿邸とRCSEB本部を訪ねて

II. 会議場にひろう

いつものごとく、会議場では人種の展覧会であり、レセプション等は各国のファッション・ショーもある。見えたるさぞかし楽しいことではあろうが…。しかし、食事をしながら、お茶をのみながら、散歩の中に、色々目あたらしい事が、耳や手に聞き触れる事が出来る。そうした事どもをひろってみよう。

1. ホテル・ラマダの火事

5月6日、実行委員会も終わり、夜のレセプションも9時30分に幕を閉じ、部屋に帰った。その日の朝からの記録をテープに吹き込んでいた。朝日新聞社の藤田さんと、ちょうどドンキー（ロバ）やカンガルーが盲導犬のように使えるのか否かと冗談を言っている最中、突如、上の部屋でケタタマシイ女性の悲鳴が聞こえた。藤田さんと家内が、窓を開けて上を見たが何事もない。きっと酒でも飲んで騒いでいるのだろうと、また吹き込みを続けた。ちょうど夜の10時頃であった。それから10分程すると、突如ドアが破れんばかりにたたかれて「ファイアー！」と叫ぶ男性の声が聞こえた。私がとっさに「火事だあ！」と叫ぶと、藤田さんが「落ち着いて、必要なものだけを持って」といい、家内がドアの方に向かって歩きながら「あわてないでゆっくり」と自分に言い聞かせながら、三人が部屋を出た。廊下には、化合物板の燃える独特の臭気が漂い、ホテルの人が大声で「エレベーターはダメ！非常階段を！」と叫ぶ。悲鳴とも似つかぬ女性の声が、ドアをたたく音とともに聞こえる。「Dr. ゾンターク、Dr. ゾンターク！ ファイアー、ファイアー！」私の部屋の2～3どなりが、世盲連会長ゾンターク博士の部屋であり、彼は失明軍人でありどちらかが義手である。彼は婦人の通訳とともに来ていたが、後で考えると、その通訳が取るものもとりあえず彼の部屋に駆けつけたらしい。藤田さんが非常階段を降りながら、「火はまだ見えないから、あわてないでゆっくり、ゆっくり」とさとすように私に言いながら、家内と二人で両脇からかばうようにして階段をかけ下りる。我々の部屋は3階であったが、その高さは10階にも15階にも思われた。下に降りてみると、まさにこっけいと言おうか、珍無類の格好の集団があった。ゾンターク博士は、いかなる暑い時でも長袖のワイシャツにネクタイをした折目正しい紳士であるが、裸足でパンツ一枚にオーバーをひっかけて、通訳に手を引かれながら降りて来た。自分がパンツ一枚であるのに気づいたのか、オーバーの裾を引っ張ってスネをかくそうとするが、オーバーはのびるはずはない。それでも彼はやっきになって素足をかくそうとしている。その様が、ご婦人方にはおもしろく、ゲラゲラと笑いがおこった。恐怖の中に笑いがおこるとは、まさに奇妙な事であるが、それは紙一重なのかもしれない。また手を引か

れた集団が降りて来た。よく見ると、パジャマにオーバーを引っかけ、レセプションの時にもらったおみやげを後生大事に数人の人が抱えている。その中身とは、こここの盲人工場でつくられた粉石けんである。「火事場で枕をかかえて逃げる」とよく日本で聞いたが、ここでは粉石けんをかかえての避難である。

藤田さんは、数少い晴眼者の1人であるので、さっそく人の確認・誘導・周囲の状況判断に、かって若かりし頃の新聞記者の感覚をよみがえらせ、あちらこちらと走り廻る。消防車がかけつけ、ハシゴ車がかけつけ、救急車がかけつけ、次いで医者が、警察官が、何と不思議なことに、どの車もサイレンを鳴らさない。この時、気がついたのであるが、ホテルではまったく非常ベルも鳴らなかつた。その装置があるにもかかわらず、そしてホテルの全従業員が盲人達の誘導に走つたのである。音なしのかまえで、戦場のような中を整然とそれぞれの役目についている。音に最も敏感な盲人達が、パニックにならないための配慮である。30ヶ国約100名（うち約80名全盲）の集団は、こうした場合、最も扱いにくくに違いない。私は、アフジャ氏がいるか藤田さんにたずねた。見あたらないという事である。とにかくまず、アジアの人間だけは世盲協・世盲連にかかわらず掌握しなければと、藤田さんと家内にその確認を頼んだ。マレーシャのウィニー女史も参加した。委員長のアフジャ氏だけがいないのである。やっと消息がわかった。夕方から地元の友人に誘われ、遊びに出たというのである。ウィニー女史が、「隣の部屋なのに、一言いって出ればこんなに心配しないですむのに」と、大声でボヤいている。

ガヤガヤとしゃべっているうちに小一時間がたつた。ボルター氏がタバコを吸っているので私も吸おうとしたが、ライターだけを持ち出し、タバコは置いて来たようである。やはりあわてていたに違いない。彼はタバコの箱から半分を紙に包んで私にそっとくれた。何と心のやさしいしぐさではなかろうか。奥さんがしゃべり出した。「10時頃、女性の悲鳴が聞こえたとき、お風呂に入っていた。主人に今のはテレビの声かと聞くとテレビではないと言う。窓を開けて外を見てほしいとたのんだら、エリックは窓をあけ、別に変わった事はない」と答えた。私は今一度お風呂に入り直し、ちょうどシャンプーを頭にぬりつけた時、ファイアーノという声を聞き、頭からタオルをかぶって衣服をつけ、エリックの手を引いてとび出した」と語ってくれた。私が彼女の頭をさわると、なるほどシャンプーだらけ、ちょうど日本のカカシがやるように、ほおかむりの姿である。あのつましやかな奥さんがと思うと、ついつい笑い出てしまい、それにつられて周囲がどっと笑い出した。

スウェーデン盲人協会会長リンドクビスト氏が説明し始めた。「火元は5階である。やっと鎮火した。ここには世盲協・世盲連関係者以外の客は、ほとん

ど泊まっていない。4・5階は水びたしで入る事は出来ない。貴重品だけを取りにもどり、袋につめてもらいたい。今夜は他のホテルが満員なので、停泊中の豪華船に泊まつてもらう」と説明した。ホテルのマネージャーが、「騒がせて申し訳ない。ビールを用意したので、落ち着く意味で飲んでほしい」と言った。消火を終えた消防士や警官が、ガヤガヤと入って来た。酸素ボンベ、ガスマスクをつけて黒装束づくめの集団である。中世のナイトのようなヨロイをつけ、ヘルメットをかぶっているという説明で、想像するとずい分たくましそうだ。どの国においても火事場に酒はつきものである。藤田さんが、「驚いた／何と婦人の消防士がいますよ」とささやいた。素晴らしい美人で若く背が高い。余談だが、ホテルから空港への帰り道、タクシーに乗ったが、その運転手も女性であり、20kgのスーツケース2つを軽々と抱えた彼女の腕を触らせてもらったが、私の太ももよりもまだ太く、身長は1m90cm近くあった。バスやトラックの運転手にも女性が多い。話がとびとびであるが、そうこうしているうちにニュースが飛び込んできた。ガスマスクをつけた消防士に1人の盲人が助けられたという。消防士が部屋に飛び込んでもなおかつ彼は眠っていたそうである。その人の名は、インドのアドバニ氏であった。皆がよくそこまで眠れたものだと感心すると、Capt.デサイが小声で「彼も年をとり、耳が非常に遠い」と言ったので、悪い事を言ったと皆は反省した。ウィニー女史が、窓からハシゴ車で降りた話をしてくれた。生まれてはじめてとの事。誰かが「貴方のようなお転婆さんには、よく似合う」と茶化したので、また笑い声が起った。彼女は口をとがらせてふくれていた。

1～3階までの人はやすんでよい。但し、エレベーターは焼けているので使用出来ないという事で、3階までの人々は非常階段を登り始めた。ノウィル夫人が私にいわく、「こんな体験は初めてだ。もし何かで本を書く場合、これを記述するのを忘れないように」と。ボルター氏も「これで火事の体験は3回目だ」と言う。私は彼に「貴方は火事に好かれているね」と言うと、「旅行の回数が多いから」と言っていた。アフジャ氏が一杯機嫌でやっと帰ってきた。皆さんざんざんイヤミを言われ、弁解に必死であった。

翌朝の新聞・テレビは、第一面の大見出しでこれを報道した。「世界の盲人たち皆助かった！」という見出しだある。火元は2ヶ所、原因はクズ入れにあやまってタバコを投げ入れたらしいという事で、定かではない。寝床に入ったのが1時半であった。3時間半のドラマは終わった。

2. 過ぎたるは及ばざるがごとし

スウェーデン、それはまた世界における最高の福祉国家とも言われる。総人

口800万人、200年近く平和を保って来た。高額所得者は累進課税により、多い人で80%近く納税している。よってこの国では、金持ちになる事は至難ではあるが、しかし逆に貧乏人もない。こうした中に、色々ゆき過ぎを見る事が出来る。かって10数年前、スウェーデンが生んだ偉大なる盲人、元世盲協会長チャールズ・ヘドクビスト博士は、私に次のような事を言った。「岩橋さん、日本はこれから福祉国家をめざそうとしている。今から言う真似だけはしないでほしい。かって、スウェーデンの障害者の年金をいかにすべきかを政府側と検討した。その時私は、障害年金の多いのは、一見福祉の模範のように見えるが、盲人を急け者にするだけだと言ったが、多くの盲人達は安易な道を選び、多くの年金を望んだ。今失明すると、失明前給料の65~70%がもらえる。それゆえリハビリテーションを受け、苦労して職業訓練を経て就職しようとする盲人はほとんどいない。多額の年金は盲人を急け者にし、就学の意欲を失い、やがて生きている事に疑問を感じ死を選ぶ。行きすぎた保護は、障害者を自殺に追いやるようなものである」。

そして、また今回もこうした事を耳にした。レセプションの席上、リハビリテーション・センターの医師が、「スウェーデンにおいて統合教育が完全に実施されていると言つてはいるが、当初、準備や計画もなく、ただ良いからという理由で盲学校から一般学校に盲児達を移した。その時、一番繁昌したのは、一般学校ではなく小児専用の病院であった。ほとんどの障害児がノイローゼになったのである」。また、隣席のプレイスメント・オフィサーが、「今、我が国では盲人の失業率が90%に近い。その理由は、まず多額の年金を受けるがゆえに就労意欲が皆無である。しかし身体障害者雇用法が出来るまでは、それでも盲人の就業者もあった。しかし雇用法の中に『各企業において、障害者を何%雇わねばならない』という項目のあとに、『もし雇用した後、企業側の理由によって馘首してはならない』と付け加えられた。どの企業も怖がって障害者雇用が激減したというのである。完璧を期して無価値なものを作った」と彼はなげていた。

会議の途中、障害者会館を訪ねた。大学を出た若い盲青年が各国の我々に向かって次のように質問をした。「我が国においては完全なる保護政策がとられ、盲人達には年金が与えられている。一般的の失業者は30%ほどであるが、盲人の失業者は90%にも達している。アメリカや英国や西ドイツ等では、盲人達が自分の能力とニーズに従い、自らの職を探し、堅い社会の門戸を叩きつつ勝ち取った自らの職業に満足と生きがいを感じていると聞くが、我々のように多額の年金を受けるがゆえに就労意欲を喪失し、無気力になって生活を送っている方が正しいのか、率直な意見を聞きたい」と疑問を投げかけていたが、ヘドクビ

スト博士の言葉を思い出さずにはいられない。

3. 世盲協ともお別れしたい

昭和29年、亡父岩橋武夫が遺言として私に話した中に、「今後、日本は世界の仲間入りをしなければならない。あの戦争中のように孤立しては、世界から袋だたきにあう。しかも戦争で、日本はアジアに多くの障害者をつくってしまった。それに謝罪しなければならない。かって、ヘレンとの約束の中に、岩橋武夫はアジアを、ヘレンはアフリカと南米を…というのがあったが、そのためにも今計画中の第1回アジア盲人福祉会議を成功させたい。（昭和30年開催、於・東京）日本と世界、アジアとのかけ橋は、私に代わりお前に託したい。」というのがあった。そして、昭和30年、ヘレン・ケラー女史が故岩橋武夫の墓前に花をたむけるため日本を訪れたとき、彼女は私に向かって、「貴方の中にはタケオが生きている。武夫の遺志を継ぎ、日本を孤立させる事なく世界とアジアに太いパイプをつないでほしい。それが貴方の役目である」と語った。私は、この2人に固い約束をしてしまった。今、故人であるから約束などどうでもよいではないかという人があるかもしれないが、故人なるがゆえに約束を果たさねばと、しゃにむに昭和29年以来走り続けて来た。国内の盲人からは「西洋カブレ」とお叱りを受けたり、一般社会・公的機関からは「好きか趣味でやっているのだろう」と冷やかに迎えられもした。しかし第1回アジア盲人福祉会議終了後、アジアにおいては世盲協アジア地域委員会の設立、点字・録音テープ等の海外郵送料割引化の実施、アジア委員会規約の制定、アフガニスタンから日本までの地域ぐるみの世盲協への参加、英文“Asian Blind”の発刊、アジア眼科医療協力会を通しての失明防止と予防、日本船舶振興会を通しての失明防止への協力依頼、1964年以降世盲協副会長としての任務の遂行、等々を先輩諸兄氏の協力によりまがりなりにも実施してきた。

今日まで、正副会長が選出された国や団体では、HKI、RNIBを除いては、すべての国はそれを誇りとして国外旅費・滞在費は何らかの形で政府から支出されている。HKI、RNIBは、民間団体とは言え日本円にして年間40～50億円近い予算をもって運営しているがゆえに、旅費・滞在費の自己負担は、年間予算5億円ほどの日本ライトハウスとは比較にならない。よって、旅費・滞在費負担は、日本ライトハウスにとって大きな重荷であった。日本ライトハウスや国内の仕事にしても、ヘレン・ケラー女史や亡父からずい分難しい多くの宿題が与えられていた。例えば、コンサイス英和辞典の点訳(73巻11年間)、世界盲人百科辞典の編纂(88ヶ国調査30年間)等々、更に今の金額に換算して、1～5億円近い建築がライトハウスに入社以来31年間に5回もあり、それへの募

金もまた体力の消耗に大きな拍車をかけた。ヘレン・ケラー女史や亡父への約束がなければ、誰が好きこのんで心労し、金のいる世貿協の副会長やアジア委員会委員長を引き受けた事であろうか、今にして思えば人一倍無力な私として、よくぞやって来たと汗顏の思いもあり、一応約束をした責任を終えた気持がする。

こうした事どもを考え、次期総会1984年以後は、引退をしたく主だった人々に自分の心境と体力の限界を伝えた。しかし誰ひとり賛意を表してくれる人はなかった。「親子二代失明し、それは悲しい事には違いないが、世界のために働いた例はほとんどない。貴方のあとを継ぐ人がなくてはどうするのだ。まずその人をつくってからにしてほしい。苦労と努力はよくわかる。しかしその実力と実践があればこそ、アジアは今日を迎えたのである。多くの人々が岩橋に頼っている。少くともあと10年は続けてほしい」という事であった。

国際障害者年のテーマは「完全なる社会参加と平等」である。アジアの人々の日本への援助の期待は大きい。特に日本政府に対し、無条件・ヒモ付きなしの援助を求めていた。いや、アジアに援助をする義務があるとさえ公然と発言する人もある。そうした期待が怒りに変わらぬうちに、経済大国日本は目をさますべきではなかろうか。日本の「全地球への完全参加と平等」を呼びかけずにはおられない。そうして1日も早く、私の後継者の出る事を望んでいる。次の後継者こそ、日本ライトハウス三代目理事長に予定している関宏之君が最も望ましいと考える。

4. スウェーデンの国籍を持つ日本人

藤田さんの通訳に雇った人が熊田さんという人で、私も家内もてっきり日本人だと思っていた。それほど彼は大阪弁が流暢で、まったく日本人と変わらないのである。しかし彼の国籍はスウェーデンであった。というのは、祖父の時代からスウェーデンに移住し、三世にあたるわけである。日本を忘れないため同志社大学に留学、関西には長年滞在し、現在では英語・フランス語・スウェーデン語の各國語が話せ、S A S（スカンジナビア航空）に勤務し、エンジニアとして活躍中である。彼の口から種々、なまの大阪弁でスウェーデンの実情を聞く事が出来た。

まず、スウェーデンに平和研究所がある。日本から社会党、原水協、総評等々の平和運動家達が必ず訪ねるが、そこには平和に関するありがたい資料が整っているわけではなく、世界各国の軍事力・作戦図等々、こと武力に関する資料がほとんどで、日本の訪問者を失望させる。各国の厳しい軍拡競争の中にスウェーデンはどう平和に生きのびるかというのが平和研究所の使命で、日本

の平和団体のように平和を抽象化し感覚的・ロマン的にとらまえ、現実の厳しさに目をそむけるのではなく、軍拡を研究する事においてのみ平和があるのだと言ってくれた。スウェーデンには279の市町村があり、27の日本でいう府県がある。この知事は中央機関で任命し、選挙ではない。税金は累進課税で多い人で80%あり、だいたい納税金中、率によって異なるが約30%が地方公共団体に入る。医療・学費は小学校から大学院に至るまで無料で、小・中校費ならびに医療費は地方公共団体が負担、大学は国の負担となっている。このように、基礎的なものは自己負担であり、それ以外は国の負担となる。福祉の行きすぎが各所に見えるが、まず国民の中に今後確実に増える老人や障害者の面倒を、数少い若者たちで見きれるかどうかの不安がある。加えて、年金をもらえるがゆえに働く意欲はなく、老令年金をもらうと一夜にしてバカ騒ぎをして使ってしまう老人や、それをアルコールに換えてしまう老人達もいる。家族と離れ、淋しさをまぎらすために酒を飲むといった傾向が増加し、政府は頭を悩ましているそうである。

会議のあとで時間があったので街に出ると、救急車が来て人が群らがっている。酔いつぶれて頭をコンクリートの角にぶつけ血だらけになっている憐れな老人の姿がそこにあった。地下鉄に入ると、酔いつぶれた老人達がうつろな目で通路の片隅に座っているのを見かけ、人間のつくり得る福祉の限界を感じられるような気もする。

5. バスの中にて

施設見学に行く車中、バスのうしろの方でマレーシヤのウィニーさんが大声でしゃべっている。その横でデサイ氏がまじめくさった顔をして座っている。ノウィル夫人やコリガン氏がころげ回るようにして大声で笑っている。何事ならんやと耳をそばだてると、次のような事らしい。

同じ飛行機で到着したので、ホテルに荷物を置いてデサイ氏とアフジャ氏とウィニーさんの3人が買物に出かけた。アフジャ氏は買物が嫌いだと言い、喫茶店で待つ事にした。頭のハゲたインドの聖人といわれるデサイ氏が婦人の下着コーナーに来た。奥さんと娘さんから頼まれた下着を買うとの事である。さっぱりわからぬ彼は、ウィニーさんに依頼した。彼女は適当に選んで更衣室の中に入った。彼女は中でカーテン越しに大声をあげて、寸法が短いだとか、大きい、小さいとかを説明すると、デサイ氏はそれを外で良い悪いと選ぶわけである。だんだん人だかりがして来るが、中にいるウィニーさんにはわからない。デサイ氏は奥さんとお嬢さんのためにガマンしてなお選択を続ける。しまいに、なみいる群衆がゲラゲラ笑い出す。やっと汗だくでカーテンから出て来たウィ

ニーさんは、あまりの人だかりに驚くとともにデサイ氏のガマン強さにまた驚いたというわけである。バスが目的地に着くまで、人々は大笑いしているにもかかわらず、デサイ氏だけがまじめくさっているので、よりおかしさを増し、車中が大爆笑の渦となった。

6. レセプションのひとこま

最終日、スウェーデン盲人協会の主催になるレセプションに招かれた。世盲協・世盲連合同の宴会である。私はコリガン氏（会計、英國）、ウィルソン氏（副会長、オーストラリア）、デサイ氏（インド）、アップル氏（アメリカ）、スウェーデンの医者、スウェーデンのプレイスメント・オフィサーと同席した。リンドクビスト氏（スウェーデン盲人協会会长）は、「最後の晩餐会である。よって今日は堅苦しい話はやめて、小話をしても時間を過ごしたい。」と前置きし、数多くの小話やユーモラスな体験談を語ってくれた。そのうち印象に残った2～3のものをあげてみよう。

- ① ある盲婦人が盲導犬を連れて電車を待っていた。なかなか自分の思う番号の電車が来ないのでイライラしていた。そばにいた中年の婦人に、「この電車は何番ですか」と尋ねた。その中年婦人は、「盲導犬をつれていて何故わからないのですか？」と問い合わせてきた。返答に困っていると、その婦人は足早に立ち去ったが息せき切って戻ってきて、「さきほどは失礼な事を言いました。よく考えてみると電車の番号は屋根についていて、犬の目の高さにはない事をうっかり忘れていました」と謝まって立ち去ってしまった。
- ② ゲテンバーグ盲人協会会长がある会議に出席し、うまく会議も運んで終わったあといっぱいやった。彼は白杖をついて街をフラフラ歩き出した。その足もとたるやまとことおぼつかない。美しい婦人警官が棍棒片手に走り寄ってきた。「もしもし、貴方は盲人ですか、それともヨッパライですか？」と尋ねた。会長はゆっくりした調子で答えた。「両方です」と。本日、その婦人警官もここに招待されていた。
- ③ スウェーデン盲人協会会长リンドクビスト氏は大急ぎでビルの階段をかけ登っていた。彼は強度の弱視であるがリハビリテーションを受けた結果、階段をかけ上がる事は朝メシ前である。しかし眼前の人の見分けは充分でない。上からビル構のような大男がおりて來た。リンドクビスト氏は勢いよく彼の胸に頭をぶつけた。この巨人は大声でどなった。「バカ者！一体お前の目はどこについているのだ！頭のうしろか」と、すると彼は答えていわく「私には目がありません」と。

こうした冗談話にうち興じ、時もすぎて夜の12時近くになって來た。最後の

閉会の辞を私にしてほしいとリンドクピスト氏が頼みに来た。別に私ではなくとも英語のしゃべれる人がずい分いるのだから他の人に頼んではと答えた。するとコリガン氏が横から「奥さんが英語でしゃべるのだから、貴方は日本語でここにいる者は大バカ者の底抜け野郎だと言っていたらしい」と言った。ノウイル会長からも是非締めくくりをと頼まれたので、止むなくマイクを手にした。「今日はすべて小話でという約束があるので、小話でもって閉会の辞としたい。1964年以来副会長をつとめているのは私ひとりで、最も古い副会長である。しかし私ほど何もしなかった副会長もまた稀であろう。よって長続きしたのではなかろうか。（爆笑）さて、私は今自宅からライトハウスまで約1時間かかって単独歩行運動をしている。ある日、大阪駅で素晴らしい香水の匂いのする数名のお嬢さんがたに取りまかれた。手引きの仕方を教えてほしいという事である。彼女達に手を引かれて神戸行阪急電車に乗る事が出来た。親切に座席を探して座らせてくれた。“お元気で、ご無事で”と握手をして別れたが、隣にいた紳士が小声で私に“あなたは幸福な人ですね。今の人々は誰か知っていますか”と聞くので私は“いいえ”と答えた。“あれは宝塚の有名な女優さんたちですよ。私など声をかけ手を握る事さえ出来ません。うらやましい限りです”と言った。私は答えて、“それでは貴方、明日から目をつぶされてはいかがですか”（爆笑）もうひとつのお話、盲導犬の訓練士が公園で休憩をしていた時、ひとりの紳士がやって来た。“これが盲導犬というものですか。でも何故目の見えない犬が盲人を導く事が出来るのでしょうか”と尋ねた。（爆笑）さて、今ここに世盲協と世盲連の代表が仲よく会議も終えて、それぞれの国に帰ろうとしている。靴は左右がなければならず、車は両輪なければその用をなさない。of the blind と for the blind の団体のいずれが欠けても、またいずれが大きくなりすぎても用をなさない。必要な事は、力の均衡を保ち、相互に信頼し、相互に協力し合ってこそ、車の両輪は役立つのである。」とのべた。

よほど感銘を与えたのか、家内の通訳がよかったですのか拍手が鳴りやまなかった。ボルター氏がやって来て「高貴なる演説」と称賛し、HKIのロバート氏、ガテマラのデスター夫人がやって来て「心を充たす知的な演説」と評してくれた。コリガン氏がやって来て「大バカ者の底抜け野郎と言っていたのではないか、奥さんがすべてスピーチしたのだろう」と、英國紳士らしく大きな手で握手を求めた。

III. 施設訪問

1. 障害者専用病院を訪ねて

朝9時30分、バスにて障害者専用病院を訪問した。通されたところは弱視専

用の病院と弱視リハビリテーション・セクションである。人口が30万人に達すると、法に従いこのようなアイ・クリニックを建てることになっている。現在27の府県中、22の府県にこの種のものが建てられている。将来は32まで拡がるという事である。町医者もしくは一般病院で弱視と診断された場合、患者はここを訪れる。精密な検査のあと、どのような弱視用レンズ・拡大文字を与えるべきかを診断する。その結果、メガネの片方に単眼用レンズをつけたものとか、各種眼鏡が無料で支給される。もし、その人が職場復帰または家庭にもどる事を希望すれば、リハビリテーション・セクションに送られる。そこでは生活訓練(ADL)と歩行訓練(OM)の2つのコースがある。またこのセクションにはリハビリテーション職員養成コースも併設されている。一般大学を出て教員の資格を持った人、特に心理学か看護婦、保母の資格を持つ人が優先して入所し、一年の教育課程を経てリハビリテーション・インストラクターの免許をうける。その結果、各地のアイ・クリニックに派遣される。すでに30名の卒業生が巣立っている。

次に、弱視リハビリテーション・セクションの説明として、一般の人は文字を読む場合、1つの単語のABCを確実に読んでいるわけではない。大まかに見て、次のグループの単語へと目を移す。そこで弱視の訓練とは、一目でだいたいどういう単語かという事を適確に素早く把握し、次へ順序よく移すことである。弱視の場合、例えば「The box is beautiful」を見るとき、boxのbとoだけが見える人とbとxだけが見える人がある。この場合、素早くboxが判断出来るようにする練習と、boxの次に1マスあいてisがあるが、2語しか見えない人はまずboを確認し、xとあいた1マス、次いでisを確認してゆくのであるが、この動作を素早くやれる方法の練習がなされ、両方ミックスする事を目的として訓練を行なったり、そのための機械器具を支給する。一番疲労度の高い作業とは、行変りとか、違った行をさがして新たに読み始める場合である。これも訓練によって疲労度を低くする事が出来る。眼球には角膜があり、そのうしろに網膜がある。網膜の中心部は見えない。見えない部分が拡大してゆくのが網膜色素変性である。また緑内障と白内障を併発して徐々に失明に近づく。こうした現象を出来るだけ止め、その停止した状態でいかに素早く文字や物体を把握して行くかを訓練するのもここの仕事である。

以上の説明があり、感銘深く参観を終わった。

2. 障害者の憩いの家を訪ねて

この主な仕事は、一般社会と障害者をどのようにつなぐか、またつなぐにはどのような方法やルートがあるかを研究する事に力を入れている。

障害者が利用する場合、福祉事務所にある申込用紙に記入する。スポーツ、レクリエーション、会議、トラベルツアーや学習会、各種サークル活動がある。盲婦人の場合、料理、編みもの、裁縫等、男性には登山、魚つり、チェス等のサークル活動が用意されている。特にスポーツやレクリエーションの場合、日本のように盲人だけでスポーツ大会をするのではなく、必らず晴眼者と統合して楽しむというシステムがとられている。6～8階には、一流ホテルにも劣らない宿泊設備があり、特に料理は最高クラスという事である。一泊日本円にして2千円（食事込み）である。また食堂には超一流の料理が用意され、健常者とのコミュニケーションの場所として最も多く利用されている。また庭は1千500m²あり、短い夏をダンス、野外キャンプ、スポーツ、野外パーティー等、社会参加の場として利用する。こうした施設の紹介の後、ゲテンバーグ市盲人協会の副会長である全盲の婦人から次のような説明があった。

当市においてもやっと盲導犬が普及し、盲導犬を持つ人が矢張り早やに増えた。年金と就職率の関係を言えば、リハビリテーションを受けても年金の方が多いので、リハビリテーションや職業訓練を受ける人が少くなってきた。一般の失業率は2～3%で、盲人の場合は90%である。よって多額の年金をもらう事は、就業意欲を阻害する事になる。次いで点字図書・録音物については、法律に従い、公立図書館内に点字図書・録音テープのセクションを設ける事になっている。この市では公立図書館の4階にそれがある。数年前までは、私立の中央点字図書館がストックホールムにあったが、国に移管された。現在、国営の中央点字図書館で製作されたものが、各府県の公立図書館の点字・テープ部に配布されてくる。それが各盲人の手にわたる。版権については、どのようなものでも点字・録音化してもよい。ただし版権料はすべて国から著者に支払われている。テープ吹込みには1時間もので約1ドルかかる。次に音声新聞の説明があったが、この国には113種類の新聞がある。その中で右にも左にも寄らない新聞が2つ選ばれ、それを録音化し90分にまとめ週2回発行している。このために払われる国の予算は、約700万クローネ（約29億円）である。なおこの市では、そのため74万クローネ（約3千万円）が予算化されている。しかし、週2回とは言え、めまぐるしい世界や社会の進展にはニュースが古くなるので、ラジオにかえて毎日放送してはという意見も出ている。しかしローカル的なものは、ラジオでは充分聞けないので、やはり物言う新聞を廃止しないとの要望がある。また中央点字図書館には、ステューデント・ライブラリーがあり、盲学生達が緊急を要する場合、直接中央図書館で作成し、地方盲学生の要望に応えている。なお、付け加えて説明があり、国際障害者年に際し、市の中央部に位置する百貨店で障害者の広場というコーナーが設けられている。そこには、

車椅子、盲導犬、手話通訳、点字本、オプタコン、等々の障害者に関するすべての器材器具が展示され、職業、教育、福祉に関するパネルや写真がはられ、社会の人々の关心と理解ある参加を呼びかけている。今後も永く続けられる事である。

N. 英国ブライトンのジョン・ウィルソン卿邸と Royal Commonwealth Society for the Blind 本部を訪ねて

1. ウィルソン卿邸にて

ブライトン。ここは捕鯨に興味を持つ方々には知られた地名であり、本年（56年）春、世界捕鯨総会が開催された場所でもある。総人口8万人、英国における最も伝統ある高級住宅地の1つである。16世紀に建てられた邸宅が修築され、目の飛び出るような価格で売買されている。日本では新築の家が高価であるが、ここブライトンでは雨もりを修理した茅ぶきの家や崩れかかったレンガ塀を改修した邸宅ほど高価である。

5月9日、ゲテンバーグを出発すべく朝日新聞の藤田さんと3人で、空港にて飛行機を待っているとウィルソン卿夫妻がやって来た。ロンドン行きの飛行機に同乗すると、ウィルソン夫人が来て「明日、自分達の家に遊びに来ないか」と言うのである。何の予定もなかったので、「喜んで」と答えると、ブライトンの駅まで出迎えるので指定した汽車に乗るようにとの事で、ブライトン行きの車中の人となった。ブライトン駅にウィルソン卿夫妻が自動車で迎えに来てくれていた。夫人の運転である。市中を案内してくれた。モスクがある。インドが英國の植民地であった時代17世紀に建てられたものである。今では大きなコンサート等に使われている。17世紀までは漁村であったがキング・ジョージ4世が側室のために妾宅として建てた城があり、この時代から開発されてきた日本から取り寄せた吉野桜の街路樹が満開である。左側の丘陵地帯には一面にチューリップが咲き乱れている。ニレの木がその中に植樹され、時期が来るとライラックの素晴らしい香りが街中を包むという。また、ここはロンドンから近いので、英國における伝統芸能や映画で有名な女優や男優の住まいも多く、車中で話に花をさかせていると、ローレンス・オリビエの自宅の前を通過していた。またヨーロッパ最大のヨットハーバーがある。英國にはビーコンというのがある。丘ぐらいの高さの分水嶺の事で、日本のように高い山はなく、ほとんどが平地であり、あちらこちらにビーコンが点在する。英仏戦争のときも、あるビーコンでのろしをあげ、次々とビーコンに伝達され、またたく間に英國全土に敵軍来襲の報が伝えられた。エリザベス女王戴冠式の時、今一度これを実験してみようという事で、南の端のビーコンでのろしをあげたが、それが北

のエдинバラまでわずか20分で伝えられたという。まさにトランシーバーや電話に匹敵する早さである。

ウィルソン邸についた。見晴らしのいい丘の上にあり、裏はヨットハーバーに続く。家の大きさは約360m四方あり、広大すぎてもちろんお世辞にも庭の手入れはよいとは言えない。ウィルソン卿夫妻と年老いた夫人のご母堂の3人暮らしである。2面のテニスコート、花壇が海の方に向かってヒナ段状に降りている。無数の鳥の声が聞こえる。優雅とはこのようなものであろうか。太陽のサンサンとふり注ぐサンルームで、昼食までのひととき色々よもやま話に花をさかせた。ウィルソン卿は令嬢の事について話し始めた。17才の頃になると家の帰りが遅くなり、調べてもらうと麻薬常習者のたまり場に出入りしているとの事であった。親としていかにすべきかと困り果てていると、警官がやって来た。彼女は麻薬をうちに行ったのではなく、警官と共に麻薬患者達の調査をしていたとの事である。もちろん殺人につながる危険な仕事ではあるが、最近英国ではこうした若者達が麻薬患者の中に融け込み、平等な立場から麻薬を断念させるよう説得し、その成果があがっているという。よって一概に「昨今の若者はダメだ」という言い方はつつしむべきだと話した。なお、今英国で問題になっているものには、結婚を前提としない同棲の若いカップルが数多く出現している事であり、今ひとつは理屈だけを言う実行性のない偽クリスチャンの横行である。また新興宗教が多くはびこり、宗教の退廃を来たしている。そうした退廃が殺人事件にもつながっている。日本に見られるような中、高校における暴力教室はまだ英国では表面化していないが、インド・パキスタンから来た難民達の子供の中にそのきざしが見られる。またアイルランドの子弟の中にも見られるが、それはあきらかに政治的な意図を持っている。英國としては、アイルランドは独立すればよいと思っているが、北アイルランドは既に独立しているにかかわらず、南がそれを望まないために独立出来ないでいる。英國政府としては両者の話し合いのうえ、独立する方向で対処しようとしている。しかし一方はプロテスタントであり、片やカソリックがあるので、いくら待っても統一は無理であろう。血なまぐさい爆弾事件が続くのもやむを得ないと彼は言う。

話題を転じ、盲人の雇用について話は進んだ。2年前まで雇用率は非常に高かった。働き得る年令の盲人の40%は職場を確保し、完全就労していた。もちろんこの中には主婦業は入っていない。よって主婦を雇用されているとみなすのはおかしいが、主婦業も含めると、働く年令の70%が就労した事になる。なお、40%の就労者は授産場ではなく、一般の企業、会社、工場に就職したのである。しかし一般にも見られるごとく、昨今英国には失業者が増加し、よっ

て盲人の失業者も増えている。正眼者の失業率と盲人とを比較すると2倍となる。そのため最近は、授産場が必要であるという意見が出はじめたが、あくまでもこれは後退の姿であるので、積極的に考えてはならない事になっている。しかし、やや経済状態が上向きになってきたので、もとに復帰出来ないかとの希望が出てきた。不況の中であっても、専門職・高級職についている人は影響はない。例えば教授・弁護士・会社経営者・ジャーナリスト・法律家等である。朝日新聞社の藤田さんがおられるので、特に盲人のジャーナリストに対しての説明がつけ加えられた。有名なジャーナリストの中には英国で一番大きいSunday Telegraphの主幹であるピーター・アトレー氏がいる。また政治部の方のエディターも盲人である。英国には盲人のジャーナリストがあまりにも多く、数え切れないほどである。ピーター・アトレー氏は先天盲であるが、中途失明者達も多い。その他、役所関係にも多く盲人が採用されている。たとえば、大蔵省の法律担当最高責任者は盲人である。日本では、福祉関係以外に盲人の官吏は少いが、この国では各省に多く活躍している。

藤田氏が質問をした。「ウィルソン卿が失明された当時も、英國は盲人に對し今のように寛大であったか」と。ウィルソン卿は、「もちろん今よりは制限は厳しかったが、自分がオックスフォードに入学したとき、何の制限もなく自由に入学出来たし、奨学金も正眼者同様得る事が出来た。また就職の場合、何らの偏見や差別もなかった。今はその時代よりももっと盲人に對し理解ある協力がなされている」と答えた。彼は続けて「1854年、ルイ・ブライユによって点字が発明されてより、世界の盲人たちには大変革が訪れたが、今はエレクトロニクスにより次の革命を迎えるとしている。それはポケット用テープレコーダーの出現である。こうした時、日本は最も大きな指導力を發揮してもらわねば困る。世界の盲教育の発祥は、1784年のバランタン・アウイによるパリの盲学校であると考えている人は多い。850年、人康親王によって山科の地に塾が開かれたのを知る人があまりにも少い。これこそが世界最初の盲教育の発祥である。なお驚いた事は、自分が日本に行ったとき、日本人自身がこの世界に誇るべき事実を知らない人が多かった。よって、こうして盲人とのつながりの古い歴史を持つ日本が、今エレクトロニクスを利用して、世界の最高技術を駆使しながら、盲人のために惜しみなき協力をしてほしいものである。自分はヤマハの楽器、ソニーのテープレコーダー、バイオニアのステレオ、パナソニックのポケットテープレコーダー等を持っている。セイコー、シチズンの盲人時計は今や各国に出まわっている。日本に望みたい事は、たとえば数ヶ月先の予定までわかる日記帳をつくってほしい。自分のように分刻みで行動しなければならない場合、何かエレクトロニクスの力で解決出来ないものであろう

か。今やテープレコーダーは、盲人にとってなくてはならぬものである。特にポケットサイズのレコーダーは、ルイ・ブライユの点字以上に盲人に革命をもたらそうとしている。よって市販されている各メーカーの電気器具中、簡単に盲人に利用出来るものがあればそれを1つにまとめ、英訳して自分の方に送ってほしい。そうすれば、それを点字に直し、スペイン語・フランス語・ドイツ語で世界各地に紹介する。」という事であった。

話がとぎれた時、夫人が昼食の用意が整ったと知らせてくれたので、食堂に移動した。昨夜遅く帰られたにもかかわらず、心のこもった素晴らしい昼食に舌づみを打った。食卓は300年前に使われていたもので、椅子も彫刻がほどこされ、食事に優雅さを加えた。昼食後、家のなかを案内してもらった。ウィルソン卿の書斎にはステレオがあり、すべて点字表示がついていた。自分でつけたという。書類はすべて書棚の中に整然と整理され、アルファベット順に並べられている。全世界の資料がぎっしりと集められ、彼の仕事の雄大さと広がりを教えてくれる。各寝室にはバスルームがつき、じゅうたんは5cmほどの厚さである。しかし彼に言わせれば、こうした造りは英国では珍らしくないと。何室見てまわったかは知らないが、夫人の部屋、子供部屋、来客用、ご両親の部屋等々を見てまわった。盲人のためにも配慮されたものは何一つない。彼は13才の時に失明し、オックスフォード大学に入った。法律学を学び、伝統あるボート部の部員でもあった。ウィルソン夫人とは学生時代に知り合い、彼女が両親に結婚の承諾を求めた時、両親は「盲人はダメだ」と言ったそうである。しかし是非会ってほしいという事で、ウィルソン氏を合わせたとき、彼女以上に彼にはれこんだという。その後、弁護士として活躍していたが、アフリカの調査隊に加わり、彼は失明防止を担当した。夫人は、彼が盲人であるから失明防止を担当したのではなく、英國政府が彼の能力を高く評価したがゆえに、失明防止の担当官に採用されたと誇らしげに語っている。その後、RCSBの長となり、その功によりSirの称号が与えられた。正眼者のSirの授与式はよく伝えられているが、盲人が体験したSirの授与式を聞くのは始めてである。クイーンの前にマントをはおり、うやうやしく伺候する、片膝ついて頭を垂れると、えも言えぬ高貴なる香りと絹ずれの音がして、自分の方に近づいてくるのがわかる。剣を抜く音が頭の上で聞こえ、軽く両肩に剣を置く感触があった。その時、私は一瞬胸の鼓動が止まるのを覚えたと語ってくれる。別にSirの称号を得たからといって、年金が与えられるわけではないが、盲人にも差別なく贈られるという実証がなされた事に、英國の識見の高さを喜ぶと話してくれた。

2. 障害者援護団体と宝くじ

スペインにおいては、宝くじを売る優先権が盲人に与えられ、その配分を盲人施設、盲人団体が受けている事は有名である。日本と同様、英国・欧州においても、宝くじに夢を託して集まる人は、年々増加の一途をたどっている。世界でも有名な宝くじ王国・日本も、是非盲人と宝くじを結びつけてはどうかとのアドバイスをしてくれる人が多かった。

英國においても、4年前から障害者と宝くじが法の改正により密接な関係を持つようになった。盲はもちろんのこと、聾、肢体不自由、精薄、老人、病弱・虚弱、子供、母子家庭等々8つの援護団体で宝くじを販売する事になった。最初の年は、400万ポンド（約18億円）の純利益があった。その理由としては、障害者援護団体で始めたという物めずらしさも手伝ったかもしれないが、くじ13本に1本の割で何かが当たるという効率のよい賞を準備したからである。しかし2年目から少しづつ純益が低下している。売る人は15%の歩合が支給される。売場所は日本同様に新聞・雑誌販売店、駅の売店等である。しかし売り子の中には、1人の障害者も雇ってはいない。それは、宝くじのイメージに障害者のイメージを混同させるのはよくないと配慮したからである。純益は55%、経費は45%である。その内訳は、30%が賞金・賞品・必要経費、15%が売り子の経費となっている。チケット1枚25ペニス（約100円）である。現在売り上げが低下したので、賞金・賞品に40%を充当すべく計画中である。またポップコーン、コーラ、ジュース等、種々様々な軽飲料水を宝くじと共に各売店で販売し、その純益金は各種障害者援護団体の運営費にあてられている。こうした活動に参加してくれる対象者は、直接募金依頼をした時に応じてくれる人々ではなく、ポップコーンが食べたい、ジュースが飲みたい、宝くじを買いたいという欲望プラス福祉に参加しようという気持を持った人である。かかる対象者は、ただ寄付を頼んでも応じようとはしないが、欲望を満たした上で、ほんのちょっとばかり福祉への関心を示すという事であり、これが大多数の庶民でもある。

3. RCSB本部を訪ねて

1964年の世盲協ニューヨーク総会終了後、RCSBを訪ねたときは、ロンドン市内のビルの一室にあった。しかし今は、ブライ頓から2つ目の駅ヘイワードヒースに移されている。3階の建物で、エリザベス女王もおいでになった由、盲人関係者であれば世界中の誰もが知っているRCSB、アフリカ、アジアをはじめ世界各地に失明防止の事業を行い、たとえばインドだけでも1979年度内に1512回のアイキャンプを行い、944,062名が診察を受け、680,072名が治療を受け、111,558名の開眼に成功している。

ちょうど日曜日であったが、ウィルソン卿夫妻は建物内を案内してくれた。彼の部屋は30畳敷の広さで、各国・団体から送られたトロフィーや楯・賞状で飾られている。ライオンズ世界大会における栄誉賞、ヘレン・ケラー賞、その他があった。しかし中でも特に私の注目を引いたのは、一階に膨大なコンピューター室があり、年間経費114万ポンド（約5億円）を生み出す募金のデータが、コンピューターの中に入力されている。約70万人に近い援助会員取扱件数があり、そのほとんどは小学生から老人に至る英全土の市民により構成されている。しかも、この担当責任者がウィルソン卿夫人であり、ご主人の方はもっぱら金を使う側に立つという。まさに内助の功とはこの事である。日本ライトハウスにもこうした募金の組織があるかと尋ねられたが、確かにコンピューターはありますが、協力者は1,000人位で、形はあっても内容はありませんと答えた。日本の持つ福祉の貧困さの一例でもある。何はともあれ、1人の子供がおやつのポップコーンを半分に減らして募金に参加し、各家庭で子供が手を洗わずに食事をしたので罰金を払うといった形で、常に生活に福祉観があり、その中からまさにチリも積もれば山となる式で数十億という膨大な金が毎年集まってくる。その根源には一体何がひそんでいるのであろうか。経済的に見れば、今やむしろ日本の方が大国である。家庭生活の上においても、我々日本の庶民と英國のそれを比較するとき、むしろ電気製品、自家用車等は、日本の家庭の方が恵まれているのではなかろうか。にもかかわらず、庶民と障害者のあまりにも希薄な縁のうすい結びつきを見るとき、何がゆえに？と疑問を投げかけずにはおられない。「機械はあっても、コンピューターをうめる材料がまったくないのです」と答えて、RCSBの門を後にした。ウィルソン卿夫妻は、「今や英國より日本の国の方が富める国であるのに何故だろう？」と首をかしげていた。